

JR 福島駅近くに、大学時代からの親友 M ちゃんがいる。何かある度に「うちの家、大阪駅からひと駅のところ。お寺やねん」と言っていた。「そんな都会の真ん中にどうやって住むのん？」「福島に寺町ってあったっけ??」と学生ながら不思議に思ったものだが、何度遊びに行っても疑問がぬぐえなかった。なんでこんな細い路地が多いのか？寺の隣に銭湯があって、妙に落ち着いた生活感が漂う、ここがホンマに大阪駅の隣のまちやろか...と。

最近になって、野田・福島界隈が、戦災を逃れた貴重なエリアだと知った。近くにある福島天満宮には空襲で焼夷弾が十二発落ちたが、全部不発で消失を免れたそうだ。M ちゃん家（ルビ：ち）のお寺も、明治末に一度焼けたが、その後移築により再建されてからは、立派な木造の本堂が維持されている。境内には、樹齢百年以上のイチヨウの木もある。近くには、昔から料亭だった町家が料理屋として営業されていたり、長屋も少しだが残っている。

福島区は10連合からなり、それが町会、班と細分化され、班は「隣組（ルビ：となりぐみ）」と呼ばれている。少し前までは、葬式などには隣組の近所で、女性はおにぎりをはじめ食事やお茶の準備、男性は仕事も休んで葬儀の雑務と、手伝いに走っていたという。

地域の話を聞いたらこの人と紹介されたのが、福島連合の民生委員長である菓子田忠也さんである。「隣組も、この10年で随分変わってきました。葬式の食事もコンビニに頼るようになって、昔のように総動員で会社も休んで手伝うことはかなり減りました。」「古い抜け道も道路の拡張でだいぶなくなってしまいましたね。」と、さみしそうだ。それでも路地は健在で、迷子になりそうなほど入り組んでいる。残存する石畳とレンガの道は、横が空き地になっていた。「お地蔵さんを通した近所のつながりはありますね。福島二丁目三丁目界隈で四箇所お地蔵さんがありますが、

お年寄りを中心に面倒をみています。特に八月の地蔵盆には、子供たちにお菓子を渡しますが、一晩で百五十人くらい来ます。」

菅原道真を祀る福島天満宮の夏祭は、大阪のもうひとつの天神祭であるが、この地車や地域の青年への地車囃子の伝授、獅子舞なども継承されている。「地車維持の資金集めは大変ですわ」とぶつぶつ言いながらも、菓子田さんは、地域の世話に余念がないようだ。

そんな菓子田さんの家は、子供服やエプロンの製造卸業社であった。うかがった時は、「ハウステンボス」と書かれたミトンにプリントアイロンをあてておられた。年季の入ったぼんぼん時計に広いアイロン作業台。「私は2代目なんですけど、もう今は商売をたたんでいます。時々こういう仕上げを手伝っているだけで縫製はしません。」

福島は、糸偏（いとへん）産業が盛んであった地域である。市内の公設市場や小売店へ卸す洋品雑貨商 メリヤス、スポーツシャツ、肌着、事務服、子供服、くつ下などの繊維関係を扱う店 が昭和初期には二百店、軒を連ねていた。昭和五十五年でも七十三社あった。「現在は三十社程度、でも商売をしていない所は十店以上あるでしょうね。卸しや小売が減少し、大型スーパーの伸びにもついていけなかった。縫子さんが高齢化していなくなったも一因ですね。」福島5丁目に近代建築の社屋をもつミナミ株式会社は、生地専門商社で、貴重な現役糸偏産業の看板であろう。

今なお息づく産業と生活が融合した、戦前の住空間が惜しまれる。

もう一駅ほど西の「野田」界隈には、古いまち並みがかなり残っている。野田二丁目～五丁目あたりを歩くと、石畳の路地、トンネルや階段のある路地などいろいろな表情の路地が楽しめる。長屋、卯建のあがっている大きな町家も少なくない。お地蔵さんがよく清められているのは、福島も野田も同じで、近所の人々に大切にされているのがよくわかる。

野田・福島エリアには、住民のための住民による地域情報雑誌「福島てんこもり」がある。A5サイズ、40ページ前後の雑誌であるが、路地での井戸端会議をそのまま掲載したかと思うほど、主婦の目からみた生活情報が生き生きと綴られている。

代表の大西俊子さんは、路地空間独特の親密さは野田の地域にはまだあると話す。「老夫婦が入ったまま風呂の鍵が開かなくなって、家族の人が助けを求めに来たことがあります。私の主人は日曜大工が得意で、近所の鉄工所の人と一緒に鍵をこじあけました。また隣の子供が“おばちゃん、トイレかして！お母さん留守やねん”と家に来ることもあります。ただね、近所の子供はもっともっと地域の人と交わらなあかんねん」と、それを仕掛けているという。例えば、区民祭りのフリーマーケットで子供に商売をさせたり、地域新聞などでメンバーを公募してサイクリングツアーを実施したり。全く知らない年齢の離れた人達としゃべる中で、消極的な子供は学校で手をあげるようになり、不登校の生徒も登校できるようになったという。

「最近が高齢化対策やね。年配の男の人にもっと元気になってもらわな困る。亭主がやる気がなく病気にでもなろうものなら、奥さんも人生を楽しめなくなる。そうならないため、まず歩きましょうと近所の人々に呼びかけているそう。そして園芸が好きな自分の伴侶を元気にするために、各地区のコミュニティセンターに集まる女性部の人に、育てた鉢をプレゼントさせるのだという。枯れたら鉢だけ返してもらおうようにするとさらに交流が生まれる。「男って、特に年下の女性に喜んでもらったら元気になるんよ。それで亭主は病気が治った。高齢夫婦が、介護されずに人生を歩き通すには、まずはダンナを元気にすることだと、まわりに推奨してます。」

路地発、お母さんの智慧はエネルギーで真に迫るものがある。そういえば福島のも

子田さんも「民生委員の女性の方にまず納得してもらわないと進まない」と笑っていた。パワフルなおばちゃん達に支えられ、年配のおっちゃん達も、せっかくの大阪都心の“路地村”生活を存分に楽しんでほしいものである。